



デジタル先導社会と人間成長過程のマッチング

佐藤 征夫

去る7月1日にJASTJは創立30周年を迎え、記念パーティーを盛会裡に終えました。創設時は、プロのジャーナリスト50人ほどの親睦会的な集まりであったそうですが、30年の積み重ねで今やプロだけでなくジャーナリズムやコミュニケーションに関心のある人たちを含む200人以上の会員の組織になっています。この間、活動を拡大し活発化させ、会員増に努めながら、自由で独立性の高い組織を支えてこられた歴代会長や関係者の皆様に深甚なる敬意を表します。

筆者は、以前から科学技術関係のジャーナリストの方々と科学技術振興の行政官としてお付き合いいただいていたのですが、JASTJの活動については余り知らずにおりました。現在理事長を務めております財団がJASTJの賛助会員であったことが縁で、2018年度より監事として組織の内部から諸活動に触れるようになり、その活発さ、質の高さに大いに驚かされました。具体的には、一流講師の月例会、会員有志の指導が特徴の科学ジャーナリスト塾、科学技術分野の優れた出版、報道等を顕彰する科学ジャーナリスト賞などで、どれも素晴らしく、科学技術ジャーナリズムの向上、発展に寄与しています。

現在、生物・医科学分野での目覚ましい進展、地政学リスクの高まりによる世界規模でのサプライチェーンへの影響、大規模自然災害の頻発等、科学技術を取り巻く環境は大きく変動していて、科学ジャーナリストの取材対象が広がってきています。

また、デジタル化の推進、とくにChatGPT等の生成AIの発展により、社会全体がデジタル先導社会へ

と移行しつつありますが、生成AIによって生み出される情報は、その量が指数関数的に増大するのに対して、人間や社会組織の成長・発達の成長曲線は緩やかであることから、身体知のような成長に伴う情報の獲得や人間が処理・対応できる情報量には限界があり、ギャップが益々広がりつつあります。

デジタル化による個々人の学習進捗度と、成長年齢に大きく依存する体育、徳育の適齢時期とのギャップに対して、年齢をベースとした従来の学校・教育システムでは対応できず、変革が必要となると思われます。また、既に一部の企業では経営陣も含めて全社的に生成AIを活用しつつあり、今後の組織運営が大幅に変わる可能性があるなど、デジタル先導社会で益々広がるギャップへの対応が求められています。

今後、科学ジャーナリストは、そのギャップの橋渡ししないしマッチングの役割を従来以上に強く意識させられると思います。従来は、科学ジャーナリストの取材先は科学者、技術者、行政官などで、取材先から得られる情報の真偽はほとんど問題になりませんでした。今後は、偽情報など生成AIがもたらすリスクの監視機能も求められるでしょう。

メディアと科学技術を取り巻く環境が激変する中で、今年度中に纏められる予定の30周年誌がさらに多くの人々にJASTJへの関心を呼び起こし、上述のような新しいメディア環境でのJASTJの今後の活動指針のベースとなることを期待しております。

(JASTJ監事/ (一財) 新技術振興渡辺記念会理事長)

CONTENTS

巻頭言	1
ニュース	
賑やかに創立30周年記念パーティー	2
科学ジャーナリスト賞2024 贈呈式・受賞者の声	4
ESOF@ポーランド開催報告	6
世界科学ジャーナリスト連盟	7
特集 JASTJ創立30周年	
振り返りに始まる30年後への展望	8

活動の源流と人 一例会、見学会、シンポジウム	9
見学会報告 (6月) 公益財団法人実中研	10
例会報告 (7月) 大学のガバナンス	11
例会報告 (8月) AI時代に記者や編集者は生き残れるか	12
WEB井戸端会議 サイバー攻撃デモ/紅麹問題	13
オピニオン/賛助会員・団体	14
理事会から/賛助会員・団体	15
事務局だより/新入会員/会員のBOOKS	16